

科学教育センター 第4回 科学教育シンポジウム

「理科教育のための教員研修を考える ―日本の理科力向上のために―

[2010-C16]

(※本シンポジウムの講演録および詳細報告を、のちほど「第4回科学教育シンポジウム報告書」として別に発行いたします。つきましては本稿では深く講演内容に触れず、行事の概要のみを報告いたしますので、悪しからずご了承願います。「第4回科学教育シンポジウム報告書」は平成23年7月ごろ発行の予定です。ご希望の方に無料でご配布いたしますので、センターまでお問い合わせいただくようお願い申し上げます。)

3月5日(土)午後1時30分より、大阪教育大学科学教育センター第4回「科学教育シンポジウム」が、天王寺キャンパス西館第一講義室にて開催された。

任田康夫科学教育センター長による趣旨説明、栗林澄夫副学長の挨拶に引き続き、本年のテーマ「理科教育のための教員研修を考える ―日本の理科力向上のために―」の下、文部科学省初等中等教育局教職員課課長補佐の安彦広斉氏、大阪府教育委員会教育室長の楠野宣孝氏による基調講演よりシンポジウムはスタートした。安彦氏は「教員養成・採用・研修を通じた理科養育の資質向上策について」と題して、アンバランスな年齢構成など現場教員の現状を踏まえつつ、「学び続ける教員」の育成をめざした教員研修の在り方、検討されている“専門免許状”などについて解説された。また楠野氏は「大阪府教育委員会が期待すること」と言う題で、高校の理科教員が小・中学校の教員対象に実験や観察の研修を出前で行う取り組みなど大阪府教育センターで行われている様々な教員研修実践を紹介しつつ、学校で教員を育てる校内研修の大切さを述べられた。

休憩を挟み、「大学は何を期待して実施し、その成果は」とのテーマで、福井大学教育地域科学部准教授、浅原雅浩氏、お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター特任講師、貞光千春氏、大阪教育大学教授・科学教育センター長、任田康夫による活動実践の報告があった。浅原氏は地域の環境と教育資源を最大限に活かしたCSTの取り組み実践について、貞光氏は地域の小学校理科への出張支援として東京都北区・文京区での実践例を、また任田は本学で実施している様々な教員研修の現状を報告した。

引き続き「受講教員は何を期待して参加し、その成果は」とのテーマで、本学の教員研修に実際に参加した現場の教員3人による報告があった。大阪府立和泉高等学校教諭深野哲也氏と堺市立泉ヶ丘東中学校教諭吉見九三一氏は、ベテラン理科教員であっても研修から新たな発見と学びが得られることをそれぞれの体験を交えて述べ、また八尾市立山本小学校教諭加藤寛己氏は、理科が専門でなかったのに様々な体験を通して理科が大好きな教員になるまでの過程を報告した。

再び休憩を挟み最後に本日の登壇者全員に会場参加者を交え、大阪教育大学特任教授・前科学教育センター長の有賀正裕による司会進行の下、総合討論が行われ、発表内容に対

する質問の他、“理科離れ”の背景にある入試問題とその改革の動き、理科教育のための地域ネットワークづくりをどう進めていけばいいのか、などについて活発な意見が交わされた。

定刻を過ぎても議論は尽きない所であったが時間の都合上、木立英行理事より謝辞挨拶ののち閉会となった。年度末の多忙な時期にもかかわらず72名（本学大学教職員22名、本学附属教員5名、他大学教員6名、文部科学省1名、教育委員会関係8名、小中高・支援学校教員16名、本学学生13名、企業1名）の参加者を迎え、シンポジウム閉会ののちは本学食堂ホールにて懇親会を兼ねた情報交換会が開かれた。うちとけた雰囲気の中、登壇者を本学教員の他小中高・支援学校の現場教員、卒業生、学生が囲み、予定時間を過ぎても各テーブルで熱のこもった会話が繰り広げられたのは嬉しいことであった。

本シンポジウムの開催に当たり、遠路より来学された発表者の先生方をはじめ、本学地域連携課、天王寺キャンパス事務部、お手伝いの学生さんなど、多数の方々にお世話になりました。改めてお礼申し上げます。

